2021 年度岩手大学総合科学研究科
総合文化学専攻修士論文要旨

# 中国の近代の翻訳語彙における日本からの影響
## －周作人をめぐって

日本文化理解プログラム
G0220008 黄燕春

## 1. 研究の背景と目的

漢学いわゆる中国の古典文学は日本の文学に幅広く影響を与えてきた。一方、二十世紀前半には、日本語から中国語への翻訳が盛んに行われたことで、逆に日本の文学が中国の近代文学に大きな影響を与えた。周作人と日本及び日本文学との関係については、従来から注目されてきた。特に、文学の翻訳の領域で当時から高い評価を得ていた。そのため、これまでは文学者や翻訳家として研究されることが多く、日中の語彙交流における周作人の役割や影響についてはあまり注目されていなかった。しかし、日本に留学した作家たちの言葉遣いは中国語の語彙史の中で注目に値する。彼らは日本語に精通しており、日中の語彙交流の過程で橋渡しの役割をしていた。

本研究では、周作人による日本文学の翻訳に注目し、周作人が翻訳の過程で用いた「和製漢語」が近代中国語にどのような影響を与えたかについて考える。周作人は一貫して直訳を主張しており、日本文学を翻訳する際に、多くの日本語の漢語をそのまま使って中国語に翻訳した。このような中国の文脈で使った漢語は「和製漢語」（他に日本語借用語、日本語外来語とも言う）と言われることもあり、その一部分は現在の中国語の中に取り入れられ普通に使われている。そこで、「和製漢語」の発生を調査しながら周作人が使った「和製漢語」の現代中国語での使用状況について検討する。

## 2 . 論文の構成

第一章では、周作人と日本語、日本文化との関係について述べた。初期の日本留学生で、帰国後新文化運動の中心人物になった周作人は、日本語や日本文化に対する態度が非常に積極的である。彼は『日本与中国』、『日本語について』、『北大的支路』などの文章で日本語・日本文化に対する独特な考えを示し、日本文化の重要性を強調している。

第二章では周作人の直訳法の形成とその実態を検討した。周作人が翻訳した『枕草子』と『少年の悲哀』をそれぞれほかの人が翻訳したものと比較すると、周作人の原文に忠実な直訳の態度が明確に見える。周作人は林紓の影響を脱して、『域外小説集』より以前の「中学為体、西学為用」（中国文学は主として、西洋文学は補佐とする）のような「中国文学のために」の翻訳ではなく、外国文学を忠実に翻訳するという「外国文学のために」の翻訳思想になり、かつ「信」を追求する同時に「達」も欠かないという成熟した直訳観を確立していたことが見られる。

第三章では、和製漢語の発生とそれらが中国に入る要因について述べた。和製漢語は時代を江戸以前の「和製漢語」と明治以降の「和製漢語」の二つに分けられる。数としては明治以降の「和製漢語」が圧倒的に多い。和製漢語が中国に入る要因は、a、言語文化的要因（漢字文化を取り入れていた日本との文化的類似性等）、b、経済政治的要因（近代の日本の経済的優位等）、c、地理的要因（近い）という三つにまとめられる。

第四章では、周作人訳文中の和製漢語について調査を行った。周氏兄弟共訳の『現代日本小

説集』に周作人が翻訳した十九篇の小説を取り上げて和製漢語の使用状況を検討した。まず、佐藤喜代治の『漢字百科大事典』と高名凱・劉正琰らの『漢語外来詞詞典』から計 1597 語の和製漢語を収集した。そして、周作人が翻訳した上記の十九篇の小説を一つのテキストデータにまとめた。このテキストデータを用いて 1597 語の和製漢語それぞれの使用頻度を調査した。その結果、周作人が使っている漢語のうち、少なくとも 108 語は「和製漢語」であると確認できた。

第五章では、現代中国語における和製漢語の受容について考察した。第四章で周作人が使った和製漢語を 108 語確認したが、その中で 23 語は形からは和製漢語かどうかの判断は難しいから、本章はそれを除いて中国の古典に例がないもの（85 語）を考察した。使用したコーパスは、国家語委『現代漢語平衡語料庫』と『新漢語水平考試大綱』である。その結果、周作人が用いた 85 語の和製漢語のうち 79 語は現代中国語で今も使われ、率にして 92.94%は占めている。そのうち 72 語（84.71%）は現代中国語の中でも使用頻度が高く、現代中国語の基本語彙に属していると言える。31 語（36.47%）は現代中国語の中でさらに使用頻度が高く核心語彙に属している。一方、6 語のみが中国語で使われないが、この 6 語のうち「和文、能楽、俳句」は日本独特なもので一般的な用語ではない。

3 . まとめ

周作人が使っていた和製漢語は現代中国語の中で依然として強い生命力を備えており、現代中国語の語彙構成にも大きく影響していると言える。周作人はこれらの語を初めて使った翻訳家ではないかもしれないが、彼の訳文はこれらの語の中国語での使用と伝播を積極的に推進する役割になったことは間違いない。

今後の課題として、佐藤喜代治らの「一覧表」と高名凱・劉正淡らの『漢語外来詞詞典』だけではなく、もっと多くの和製漢語を収集する必要がある。また、『漢語大詞典』には古典の例が足りないので、もっと多くの辞書を用いて調べる必要があろう。たとえ中国の古典に例がないものでも、英華字典か英和字典かのどちらで先に確立されたか、もう一度確認して直す必要がある。